

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01870

研究課題名(和文) 東シナ海域の基層文化と人々の生活：日韓境界領域の事例より

研究課題名(英文) Common Cultural Foundations and People's Lives in the Maritime Areas of the East China Sea: Comparative Case Studies of the Japan-Korea Borderlands

研究代表者

金 明美 (Kim, Myungmi)

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：50422738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、東シナ海域の基層文化を生活文化の観点から再考するために先行研究が掲げる4調査項目、同年齢集団・関係、キンドレッド(父方・母方の親戚関係)、人々が自主管理するムラの宗教的センター(お堂/ダン)、女性の役割(との関連で)の有効性を検証することである。この事例検証のために、日韓の境界領域で、現在も地域の共同生活に根差した文化が維持される共同体としてのムラやムラ的な共同性が見られると考えられる場でフィールドワークを実施した。その結果、多くの事例で、これらの調査項目が確認され、地域的な個別文化に通底する共通基盤が日韓の境界を越え、さらに東シナ海域に広がっている可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、地域に根差した人々の生活に深く埋め込まれた基層文化を捉えるための新たな指標の有効性を事例検証したことで、海域研究の課題である民衆生活の次元における海を介した交流の諸相の解明に寄与し、海域研究の進展に繋がりうるフィールドデータを提示できたのではないかと考える。

社会的意義としては、東シナ海域の基層文化についての新たな知見・方法の事例検証を通して、従来の国民国家の枠組みを基調とする「地域研究」や比較研究で見落とされてきた日韓共通の文化的基盤の存在を示唆したことで、グローバル化時代に一層重要となる国境を越えた交流の推進や平和構築に寄与しうる点があるのではないかと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the validity of the following four research subjects: (1) same age groups, (2) kindred or both paternal and maternal relatives, (3) a small shrine or sacred place as a village religious center, (4) the role of women. The four subjects were presented from the perspective of cultures embedded in everyday life by the preceding research which critically reconsiders the fundamental cultures shared in the maritime areas of the East China Sea. For this case examination, I conducted fieldwork in villages or similar fields where cultures deep-rooted in community life are assumedly maintained. These research fields are located near the border between Japan and South Korea. As a result, I found that the four research subjects apply to many cases. This result supports the new argument for common cultural foundations which underlie the surface of local cultures beyond the Japan-Korea border and moreover spread throughout the maritime areas of the East China Sea.

研究分野：文化人類学

キーワード：東シナ海域 基層文化の再考 日韓の境界領域 生活文化 同年齢集団 キンドレッド ムラの宗教的センター 女性の役割

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 海域研究の動向：

日本で近代的な国境を相対化・歴史化する海域研究は、一国歴史学への挑戦として、中世史の研究者を中心に開始されたといえよう。そこでは考古学者や民俗学者等とも連携し、文献だけでは把握しがたい民衆生活の次元に関わる海を介した交流の諸相を明らかにしようとする試みが見られた(例、網野善彦他 1992『海と列島文化 第4巻 東シナ海と西海文化』等)。その後、海域研究は、日本列島だけでなく東アジア全体を含む海域の人・モノ・情報の往来を検討する国際的共同研究など(例、小島毅監修 2011『(東アジア海域叢書) 海域世界の環境と文化』等)へと発展していったが、その多くは未だ文献史学による過去の世界の再構成が中心であり、民衆生活の次元において海域交流の諸相や痕跡を見出そうとする試みの進展はあまりみられない。

(2) 先行研究の検討：

民衆生活次元の諸相を明らかにする上で、考古学や民俗学的検討も重要ではあるが、文献だけでは分からない過去から変容した/していないことは、現地に行き、人々と共に生活したり、相互行為したりする中で理解できることが少なくない。この意味で、文化人類学的なフィールドワーク(参与観察)に基づき、生活文化の観点から東シナ海域研究を行っている原尻氏の一連の研究には注目すべきものがある(例、原尻英樹 2012『濟州島のダン(堂)と壱岐島のお堂：東シナ海域における共有化されている文化と『カミ』』津波編『東アジアの間地方交流の過去と現在』等)。なぜなら、日韓国境域の島々でのフィールドデータと先行研究の検討に基づいて、従来の日韓の差異を強調する言説の政治性を指摘し、ムラの共同体の維持に重要な人間関係や信仰のあり方には日韓共通の類似点が見出せることを例示すると共に、さらにそれらが東シナ海域の「基層文化」を再考する上で新たな調査項目になりうることを提示したからだ。原尻氏が掲げる調査項目とは主に 同年齢集団・関係、 キンドレッド(父方・母方の親戚関係)、 人々が自主管理する宗教的センター(お堂/ダン)、 女性の役割(との関連)等であり、特に とは、先行研究が朝鮮半島の伝統的な社会・文化にない、或は例外的であるとみなしてきた項目である。

(3) 研究代表者のこれまでの研究との関係：

研究代表者は所属先の特別研修制度を利用して約1年間(2014-2015年) 濟州島東部の村落(吾照里)で長期の滞在調査を行った。1年を通じてムラの生活を参与観察することを通して、ムラの共同体が原尻氏の提示する各調査項目と密接に関係して形成維持されていることを様々な場面で確認したのである。しかし、吾照里の事例だけでは、調査項目の妥当性の検証にならないと考え、本事例を相対化するためのさらなる調査の必要性を認識するに至った。

2. 研究の目的

日韓の境界領域に位置する地域でフィールドワークを実施し、特に先行研究が生活文化の観点から東シナ海域の基層文化を新たに捉えるために掲げた主に4つの調査項目についてフィールドデータを収集し、それらの事例分析を行うことで、本調査項目の検討を通じた、生活文化の観点からの新たな海域研究の有効性を検証することである。ここで4つの調査項目とは、 同年齢集団・関係、 キンドレッド(父方・母方の親戚関係)、 人々が自主管理するムラの宗教的センター(お堂/ダン)、 女性の役割(との関連)である。

3. 研究の方法

(1) 方法論的観点：

「基層文化」を表層からは見えにくい、長期的な時間サイクルの下で生活文化に深く埋め込まれてきた文化であると捉える。構築主義的観点からはこれを本質主義的だとし、否定的に捉える向きも見られるが、ここでは基層文化を古代或いはそれ以前に遡る「グローバル」な広がりを持った海域共通の文化的基盤として再解釈するための積極的意味を持った概念として見出したい。なぜなら、東シナ海域には国家の境界が引かれる以前から、人々は地域ごとの自然環境に合わせて自らの生活文化を築き、また海を介したコミュニケーションも展開してきたのであり、そこにはローカルな個別文化の形成と共にこれらの各個別文化に通底する共通の文化的基盤も形成されてきたと考えるからだ。この考えの背景には、近年の海域交流に関する先行研究の検討を踏まえ、東シナ海域における人、モノ、情報の流れを一方向的な「文明化」や文化伝播として捉えるのではなく、地域の諸文化が交流、相互浸透する過程として再考するという観点がある。

(2) 調査方法：

生活文化の観点からの新たな海域研究の有効性を実証するために、すでに調査を行っている濟州島の吾照里の事例を踏まえ、それを相対化するための事例調査を行う。

そこで、まず調査地を大きく、1)濟州島内の別の地域、2)濟州島外の地域(朝鮮半島南部)、3)海峡・国境を挟んで接する日本の地域(北部九州の島嶼部)、4)その他の地域の4つに分けた。次に、吾照里の調査から明らかになった次のことを踏まえ、吾照里の人々のツテを頼れる地域や吾照里と何らかの関係のある地域を具体的な調査対象地として候補に挙げた。(表1)

・吾照里は行政上城山邑に属し、信仰圏は隣村の本郷堂及びより広域の区域に属す。(地図2)

- ・吾照里から蔚山、釜山、莞島等への移住者と莞島、突山島から吾照里への移住者がおり、何れの人々も移住前の繋がりを維持しつつ移住先に定着している。(地図1)
- ・吾照里は城山港に隣接し、漁業関係者が多く、海上で五島列島、平戸、対馬、壱岐等の漁船とすれ違うこともある。解放前是对馬へ出稼ぎに行った海女も多かった。(地図1)
- ・吾照里からの日本への移住・移動は、解放前から大阪等で都市労働のほか対馬での海女漁を経ての都市労働などが多いが、鳥羽市や伊豆半島で海女漁に従事する人もいた。(地図1)

調査方針として、表1に挙げた候補地は可能な限り調査を実施する(但し、伊豆半島と大阪ではすでに調査経験があり、関連する調査データもあるため、時間的余裕があれば行う)。また、基本的には、共同体としてのムラ、或いはムラ的な関係性の維持が見られると考えられる場を中心に参与観察を行い、生活の全体的な諸相(自然、生業、人間関係、宗教等)を記述し、それを取り巻く歴史的・地域的文脈に位置づける。特に、生活文化の観点から東シナ海域の基層文化を新たに捉えるための項目(同年齢集団・関係、キンドレッド(父方・母方の親戚関係)、ムラのお堂/ダン、女性の役割(との関連))を検討する。

| (表1) | 調査対象地1 | 調査対象地2 | 調査対象地3 | 調査対象地4 |
|----------------|--|----------|----------|-----------|
| 济州島内の地域 | 吾照里の隣村の水山里を含む同一信仰圏のムラ、その上位行政区域(城山邑)のムラ | | | |
| 济州島外の地域 | 蔚山(慶尚南道) | 釜山(慶尚南道) | 莞島(全羅南道) | 突山島(全羅南道) |
| 海峡を挟んで接する日本の地域 | 五島列島 | 平戸島 | 対馬 | 壱岐島 |
| その他の地域 | 伊豆半島(静岡県) | 鳥羽市(三重県) | 大阪 | |



4. 研究成果

生活文化へのアプローチから東シナ海域の基層文化を明らかにするという本課題にとり有益な現地資料が得られた。本課題がフィールド調査上の観点として設定した次の四項目、同年齢集団・関係、キンドレッド(父方・母方の親戚関係)、ムラのお堂/ダン、女性の役割(との関連)について、得られたフィールドデータは以下の通りである。一部の事例を除き、多くの事例でこれら四つの調査項目を通して東シナ海域の「基層文化」を再考することの有効性が確認された。また、調査の過程で「基層文化」の再考をさらに進める上での示唆やデータも得られた。

(1) 济州島内の別の地域での調査結果

・水山里(吾照里の隣接村で山側のムラ)と温平里(城山邑内の海側のムラ)の調査より:
吾照里同様、ムラの共同体の維持にとって ~ の重要性が確認されると共に、「マウル」(ムラに相当する韓国語)よりも下位の小集落である「トンネ」にも ~ の基盤があり、現在の水山里というムラの共同体が維持されるのは、その原型にトンネ次元の共同体維持の仕組みがあることが確認された。

また、従来、地理的位置からムラを「中山間村」(水山里)、「海村」(吾照里、温平里)と区別し、これを前提に、生業や信仰形態の違いや共同体としてのムラが共時的に表象されてきた。しかし、本調査でのトンネ次元のデータからは、そうしたムラの表象に収まらない人々の生活の営みの動的過程が見えてきた。特にそれは、ムラの堂(ダン)に関し、ムラ内に複数ある堂やそこでの祭祀(巫俗儀礼であるクツ)の観察から考察された。例えば、水山里には、吾照里を含む5つのムラ共通の村神を祀る本郷堂があるが、その儀礼過程には、トンネ次元の堂への巡礼等が組み込まれ、重層的な信仰実践が見られる。また、温平里など「海村」での海女中心の祭りとなる海女クツやヨンドンクツ(ヨンドンとは1年に1度济州島を訪れる来訪神のこと)も同様で、それらは本郷堂をはじめ、トンネ次元の各堂への巡礼実践が組み込まれた村祭でもある。この調査結果は、济州島の原初的な信仰形態の再考だけでなく、朝鮮半島部で農楽隊が各戸巡回

する儀礼や日本での霊場を巡礼する宗教実践を新たな視点から見ると示唆的であると考えられ、東シナ海域の基層文化の再考の議論を進展させる上で重要なデータといえる。

(2) 済州島外の地域（朝鮮半島南部）での調査結果

ここでは計画していた4つの調査地に加え、青山島（全羅南道）統営市と巨済島（慶尚南道）でも調査を行った。追加の調査は、フィールドワーク中に得た情報に基づいて実施された。

・蔚山（広域市）と釜山（広域市）での調査より：

二市に在住する済州島出身者やその子孫は多いが、特に蔚山市では東区、釜山市では影島区に集中する傾向が見られる。これは解放前から済州島の海女たちの出漁先であったところで、海女たちが当地に定着するに伴い、同じムラ出身者が集住する一角が形成されていったという。吾照里出身者もこれに漏れず、移住先でも～に関係する諸縁を利用して、済州島のムラの間関係やネットワークを作り、いわば第二のムラを介して現地生活へ適応してきたことが見えてきた。特に～については、ムラの堂はないが、その代りに済州島から招かれたシンバン（シャーマンを意味する済州語）や当地で降臨巫となった海女が個人的/集団的な巫俗儀礼を实践することで、ムラの世界観が維持されたことが分かった。その一方で、移住先には土地の人々によるムラの共同体があり、そこでも～と同様或いはそれらに類似した共同体形成の仕組みがあることが分かった。それが一世代の人々の当地への適応や二世世代以降が「現地人」となる過程に少なからず関係していることも見出された。また、蔚山市東区（方魚津）は日本統治期に岡山県日生（日生諸島）からの移住漁村があったところで、この漁村共同体の宗教施設が～に関連してあったというが、このことは東シナ海域の基層文化の再考をさらに議論する上で示唆的といえよう。

・莞島・青山島（全羅南道）での調査より：

吾照里の海女たちが運営する食堂の売りはアワビ粥だが、近年アワビは済州島の海で枯渇しているため、海上養殖された味のよい莞島産アワビを使用しているという。その仕入れ先は、海女として莞島に渡った元海女が運営する仲介業者であり、その元海女を訪ねて莞島にいったところ、莞島産の多くは莞島周辺の青山島の臨海で養殖されており、済州島出身の海女たちの多くも青山島にいたことが分かった。莞島・青山島方面に渡った海女たちは現地男性との婚姻により定住するか夫婦で移住している場合が多い。蔚山や釜山とは異なり移住者の集住は見られないが、～に関係する縁を利用した済州出身者間のネットワークが見出せる。とはいえ、蔚山や釜山と同様、済州島海女が現地への適応を進めていく過程には、移住先である青山島に済州島のムラと類似した共同体を形成・維持する仕組みが少なからず見られることも分かった。

・麗水市（突山島を含む）統営市と巨済島（慶尚南道）

吾照里には莞島出身の蛸漁の漁業者がいるといわれていたが、彼らから直接話を聞いたところ、何れも突山島の新基ムラの出身者であった。漁場を求めて定期的に済州島周辺と莞島周辺の海を往復しつつ生活するため、莞島出身者と思われるようだが、彼らが莞島周辺で漁を行う際に拠点とするのは、莞島ではなく周辺の小さな島で、そこは妻の出身地だという。吾照里/莞島周辺の島での生活は何ら問題なく、ムラの行事への参加にも抵抗がないといい（実際そうした場面も目にした）故郷の新基ムラで生活していたときの感覚と同じだという。ところが、出身地の突山島の新基ムラにいった分かったのは、現在ではムラの堂は廃り、ムラ祭りも活発でないことであった。ムラの宗教的センターになっているのはキリスト教会であるという。また、新基ムラは蛸漁のメッカであり、それはムラの人々が蛸漁の技術を開発してきた歴史があり、この技術をもってよりよい漁場を求め他地域に出た人々が多いということも知った。新基ムラでは、かつて莞島方面と済州島で蛸漁を行った人々にも会ったが、済州島での生活を懐かしがっており、近年の新基ムラの変化は大きいという。高齢男性が集う敬老堂で話を聞いた限りでは、～と～について確認できたが、～については高齢女性が集う敬老堂で詳しく話を聞く必要がある。

また、突山島をはじめ麗水市にはかつて済州島からの海女も少なくないことも分かった。多くは現地の男性と結婚し、現地に定住しているが、その中で吾照里から麗水にきて50年以上経つ、すでに海女を引退した人（80代）にも会うことができた。この方から話をきくことで、統営市と巨済島にも済州島出身の海女がいることが分かり、それらの地域をも訪れた。特に統営市には蔚山や釜山でかつて多く見られた、海女漁を行う人々の繋がりによって形成された済州島出身者の集住地があり、そこで～の諸縁について確認できたが、ここには済州島出身者の利益を守るための漁業者の組合もあった。一方、現地の旧住民のコミュニティは廃れ、都市化が進んでいるようであったが、これについては具体的な調査をすることができなかった。巨済島については済州島の海女の拠点が何か所かあることを確認するに留まったが、何れも～の諸縁を通じた済州島出身者間のネットワークはあるようであった。

(3) 海峡・国境を挟んで接する日本の地域（北部九州の島嶼部）での調査結果

・対馬での調査より：

戦前済州島からの海女たちの集住地があったという対馬北部のムラ（上対馬町豊）を中心にフィールドワークを行うと共に、済州島出身の海女とその息子に対馬での生活史について聞き取り調査を実施した。その結果、～についてある程度確認できた。その中でも興味深かったの

は、豊のムラの中にある神々を祀るお堂や空間を巡礼する民俗宗教的な実践が現在も細々と維持されていることであった。また、どこの出身かに拘わらず、漂着した無縁仏を丁重に扱う民俗信仰上の実践がある一方で、土地の人々が形成するムラの共同体にヨソモノが入りにくい仕組みがあることも見えてきた。

・五島列島北部の小値賀島（長崎県北松浦郡）での調査より：

現地では小値賀町教育委員会の文化財担当の方にご案内・仲介いただいたおかげで、島内の多くのムラを訪問し、ムラが成立してきた歴史的背景の違いなどを確認しながら、現存する～について確認することができた。中でも唐見崎地区では、村の女性たち（70～90歳代）が自主管理しているお堂での祭りを参与観察する機会を得ることができ、さらに女性たちへの聞き取りを行うこともできたので、特に～と～に関する具体的なフィールドデータを収集することができた。また、小値賀島との比較で五島列島の他の島々に関する情報も得ることができ、これらの島々での調査への足掛かりをつかむこともできた。

4) その他の地域での調査結果

・鳥羽市答志町（三重県の答志島）での調査より：

答志地区の神社の宮司（郷土史家でもある）への聞き取りと宮司の案内で答志地区を踏査したことを通して、～についてある程度確認することができた。特に～に関しては、桃取地区の事例が日本の若者組織研究で知名度が高いが、答志地区についての具体的な話を聞くことで、桃取地区の事例が相対化された。また、これに関係し、島内は現在三地区で構成されるが、各地区には前近代から各々独自の文化があり、そこには島内に人々が移住していった経路の違いなど歴史的背景があることが分かった。また、答志地区には特に海女漁を行うムラの女性たちが多く（調査当時は休漁中）、戦前は朝鮮半島まで出漁していたほどであったという。～と～については海女漁の時期に答志地区を訪問し、改めて女性たちから聞き取りを行う必要があると考えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 金明美 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 [Commentary] Symbolic Politics Revitalization: a Case Study on Yushara-cho, Japan, by Jin Myeongsuk | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Korean Anthropology Review ISSN 2508-8297 (Print) ISSN 2671-7123 (Online) | 6. 最初と最後の頁 105-111 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 日本における前近代的共同体の再考：村落共同体研究の再検討と現地調査より（原題は韓国語） |
| 3. 学会等名 韓国文化人類学会秋季学術大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 東中国海域研究所見済州島村落調査的意義及課題 |
| 3. 学会等名 中国浙江地区与韓国友好交流国際学術会議及び崔溥漂海登陸530周年記念会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 「東シナ海域」研究に向けての一考察：韓国・済州島でのフィールドワークより |
| 3. 学会等名 日本文化人類学会第52回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 日韓共同研究の成果と今後の展望について |
| 3. 学会等名 平成28年度日本学術振興会韓国との共同研究(NRF)第4回共同研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 伝統社会の共同体原理とは何か：現代の『我々』の社会を再考してみよう（原題は韓国語） |
| 3. 学会等名 全北大学考古文化人類学科BK21Plus（文化融合地域発展専門人力養成事業団）第12次海外碩学招待講演（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 民族誌的研究成果の報告：済州島の村落コミュニティ |
| 3. 学会等名 平成28年度日本学術振興会韓国との共同研究(NRF)第1回共同研究会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 金明美 |
| 2. 発表標題 コミュニティ研究のレビューと研究展望：済州島の村落コミュニティ調査との関連で |
| 3. 学会等名 平成28年度日本学術振興会韓国との共同研究(NRF)第2回共同研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計13件

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 金明美(第13章)、梁聖宗、金良淑、伊地知紀子、李善愛、伊藤亜人、呉光現、大村益夫、河原典史、高二三、高鮮徹、高誠晩、佐々木史郎、高橋公明、高村竜平、鄭雅英、塚崎昌之、津波高志、野村伸一、橋本繁他 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 355(89-96) |
| 3. 書名 第13章「村落の類型と多様性：今も息づくムラの伝統と人びとの絆、そしてその行方」梁聖宗・金良淑・伊地知紀子編著『済州島を知るための55章』(エリア・スタディーズ166) ISBN 9784750346762 | |

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 金明美(序論訳)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 民俗苑(韓国) | 5. 総ページ数 382(15-32) |
| 3. 書名 (韓国語訳)「序論」原尻英樹・金明美共編著訳『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』(Minsokwon archebooks079) ISBN9788928510276 | |

| | |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名 金明美(第6章訳)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 民俗苑(韓国) | 5. 総ページ数 382(171-212) |
| 3. 書名 (韓国語訳)第6章「ムラの諸集団活動にみる『共同体』：済州島0ムラの事例より」原尻英樹・金明美共編『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』(Minsokwon archebooks079) ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名 金明美(第7章訳)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 民俗苑(韓国) | 5. 総ページ数 382(213-262) |
| 3. 書名 (韓国語訳)第7章「済州島における『共同体』の形成維持と宗教性：0ムラの事例にみる巫俗の再考」原尻英樹・金明美共編『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』(Minsokwon archebooks079) ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名 金明美（第8章訳）、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 民俗苑（韓国） | 5. 総ページ数 382(263-278) |
| 3. 書名 （韓国語訳）第8章「庶民生活史的アプローチからみる済州島：高光敏氏の研究より」原尻英樹・金明美共編『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』（Minsokwon archebooks079） ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 金明美（イントロダクション）、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408（11-28） |
| 3. 書名 「イントロダクション」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名 金明美（第6章）、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408（185-228） |
| 3. 書名 第6章「ムラの諸集団活動にみる「共同体」：済州島0ムラの事例より」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|--------------------------|
| 1. 著者名 金明美（第7章）、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408（229-278） |
| 3. 書名 第7章「済州島における『共同体』の形成維持と宗教性：0ムラの事例にみる巫俗の再考」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|---------------------------|
| 1. 著者名 金明美 (第8章)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408 (279-298) |
| 3. 書名 第8章「庶民生活史的アプローチからみる済州島：高光敏氏の研究より」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|---|---------------------------|
| 1. 著者名 Kim Myngmi (英文イントロダクション)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408 (406-393) |
| 3. 書名 (英文イントロダクション)「Introduction」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|--|---------------------------|
| 1. 著者名 金明美 (第9章訳)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408 (299-304) |
| 3. 書名 (日本語訳)第9章 高光敏著「コリ(行李)の三国誌」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|--|---------------------------|
| 1. 著者名 金明美 (第10章訳)、原尻英樹、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408 (305-337) |
| 3. 書名 (日本語訳)第10章 姜晶植著「済州島巫俗研究の現況と課題」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

| | |
|--|-----------------------------|
| 1. 著者名 金明美・原尻英樹（第11章訳）、高光敏、姜晶植、李允先 | 4. 発行年 2015年 |
| 2. 出版社 かんよう出版 | 5. 総ページ数 408 (339-368) |
| 3. 書名 （日本語訳）第11章 李允先著「島地域のカンガンスルレの跳び合いの伝統と求愛方式：新安、珍道を中心に」原尻英樹・金明美共編著『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島：その基層文化と人々の生活』 ISBN 9788928510276 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| 1、研究室HP（研究紹介） http://www.inf.shizuoka.ac.jp/labs/society_detail.html?CN=153394 2、須川英之2018『海女の群像：日韓交流は対馬から、新時代の日韓の虹の架け橋を目ざして』（調査協力） 3、2019年9月29日長崎新聞「弘法大師への信仰なぜ？遣唐使船最後の寄港地、五島列島」（取材協力） |
|---|

| 6. 研究組織 | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |